

同僚船員 労災 2人目

半世紀前に蒸気貨物船でアスベスト(石綿)を吸引して胸部がんの「中皮腫」になり、今年3月に労災認定された広島市南区、元日本郵船社員、笠原昭雄さん(4月)に71歳で死亡した同僚で兵庫県在住の男性だが、同じ病気で社会保険庁から労災認定を受けていたことが7日、分かった。同僚の元船員2人が相次いで認定されるのは異例。当時、船員が濃厚なアスベスト環境にいたことを示すもので、同社関係ではさらに2人の労災請求の動きがある。専門家は発症時期

を、同じ船に乗り込み、その後、石綿とは無関係の外資系貿易会社で働いた。今年1月、突然、体調の不良を感じ、3月に神戸市の医療機関で「悪性胸膜中皮腫」と診断された。笠原さんの認定を新聞報道で知り、労災請求して9月に認定された。中皮腫の国内での発症率は現在、約14万3000人に1人とされる。男性は「中皮腫の原因が仕事中に吸ったアスベストと知らずに亡くなった人も多いのではないか。これ以上、同僚から(患者が)出ないことを祈り

「アスベスト吸引 中皮腫」で認定

から今後、中皮腫が全国で多発する恐れを指摘している。

たい」と話している。

男性は笠原さんと同じ1951年に日本郵船に入社。機関士として約6年間、蒸気船のボイラーなどに使われた石綿製の断熱材の補修やメンテナンスなどに従事した。笠原さんとは約3

日本郵船はOBを対象に「石綿労災の相談窓口」を設置。現在、新たに元社員と関係会社の計2人が労災請求に必要な在籍証明を求めてきたという。1955年度末の船員保険加入者は16万4831人。【大島秀利】

60〜80歳代は注意を

民間相談機関「中皮腫・じん肺・アスベストセンター」(03・56277・60007)代表の名取雄司医師の話 1950年代と60年代の船舶は閉鎖された

空間に多くの石綿含有製品が使われ、関連がんの多発を懸念していた。中皮腫の発症は多くが30〜50年後で、現在60〜80歳代の人は注意が必要だ。10年以内に中皮腫などにくくなった人の遺族も補償の可能性がある。

半世紀前 蒸気船乗務員に 専門家の「多発の恐れも」